

ノヴァーリスの「断章」とは何か：記述しえないものを記述する

大澤，遼可
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/2229665>

出版情報：九州ドイツ文学. 30, pp.23-37, 2016-10-31. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：

ノヴァーリスの「断章」とは何か

— 記述しえないものを記述する —

大澤 遼 可

はじめに

ノヴァーリスは断章集「逸話」(Anekdoten)において次のように記している。

ばらばらの断章 (Fragmente) をつくりだし、そして日常世界における有効なあらゆる見方や考えの根底は断章であると証明すること。(II, 593, 302)¹⁾

「あらゆる見方や考えの根底」が「断章」であることを証明するためには、「日常世界」ひいては世界のいっさいが「断章」によって記述されなくてはならない。だが「断章」のそうした可能性は一体どこに由来するのだろうか。本稿はノヴァーリスの「断章」概念について考察するに際し、この概念がいずれも深く関わっている三つの位相を辿っていく。すなわち断章としての「世界」、断章としての「人間」、さらにはいっさいをそのようなものとして「記述する」という行為そのものに焦点を当て、ノヴァーリスが試みた「断章」による記述をさまざまな局面において考察する。またその際、なぜ「断章」が「あらゆる見方や考えの根底」たりうるのかという疑問も同時に解明されるだろう。

1. 世界は精神である

われわれが経験するすべては伝達 (Mittheilung) である。そうであれば、世界は本当は伝達——精神の啓示 (Offenbarung des Geistes) ——なのだ。神の精神が理解できた時代はもはやない。世界の意味 (Sinn) は失われてしまった。われわれは文字のもとに立ちつくしてしまった。われわれは現象の上に現れるものを失ってしまった。定式化の本質。(II, 594, 316)

このように述べるノヴァーリスは、「世界」を無機的な物質の集合体もしくは機械のような仕組みとは見なさない。本章の第一節においては「世界」を「精神の啓示」とするノヴァーリスの意図が考察の対象となる。だが一方で彼によれば、「神の精神が理解できた時代」ではもはやない以上、「精神の啓示」は成立しない。第二節においてはそこに焦点を当てる。第三節においては、成立しなくなってしまった「精神の啓示」がどうすれば再び成立するとノヴァーリスが考えていたのかを探る。

1-1. 世界は啓示である

非機械論的・非物質論的なノヴァーリスの世界観においては、世界のあらゆる現象は例えば次のように記述されることになる。

色彩が屈折させられた光 (gebrochenes Licht) であるように——音も、こういう意味で妨げられた運動 (gebrochne Bewegung) にほかならないように思われる。

ダンスは、最も密接に音楽と結びつき、いわばその半身である。

音は、いわばおのずから運動と結びつく。

色彩は、いわば物質と光の中間状態であり——光になろうとする物質の希求——そして逆に物質になろうとする光の希求——である。

性質とはすべて、上記の意味で——妨げられた状態なのだろうか。

運動の多様性に覚える喜び。

結晶化の形は——妨げられた重力であろうか。

形状形成に与える混合の影響。

結晶の形は電気を起源とするのではないか。(III, 561, 43)

「色彩」が「屈折させられた光」であるなら、「音」は「妨げられた運動」である。われわれは「光」や「運動」をそれ自体として捉えることができない。しかしそれらが何らかの妨げを受けたとき、それらは「色彩」や「音」といった現象として捉えられる——これが上記引用にあらわれたノヴァーリスの世界観である。さらにこうした考え方は、「性質とはすべて」「妨げられた状態なのだろうか」とあるように、色彩や音にとどまらないあらゆる現象に適用される。ノヴァーリスにとってこの「世界」とは、単なる物質などではなく、その現象の向こうに流れる捉えがたい何か、例えば結晶においては重力が妨げられて生じる現象なのである。さらには別の個所において、このことは次のように表現されている。

ある種の妨げはさまざまな音色を巧みに引き出すために——あるときはこの穴またあるときはあの穴をふさぎ——そして見かけに従って判断すれば、音のする穴としない穴とのこの上なく恣意的な連関をつくり出すフルート奏者の指使いに似ている。私自身について。

白い光における色彩の統合。(II, 374, 36)

フルートに吹き込まれた氣息は、楽器の構造からの「妨げ」を受けることによってはじめて音に変化する。フルートの穴がさまざまに塞がれることで、その音色もまたさまざまに変化する。その音色はフルート奏者の「指使い」がなければ、単調な一音である。さらにはそもそもフルートという「妨げ」なしには、吹き込まれる氣息が音として現象することはありえない。光が何らかの「妨げ」を受けない限り、それは「白い光」のままであり、さまざまな色彩の変化などありえないのと同様である。²⁾ ここでは、先に挙げた断章43に

おいて捉えがたいものの一つとして挙げられていた「音」が、さらに捉えがたい氣息へと昇華されている点に注目すべきである。なぜならこの氣息という概念は、現象世界を「精神」、あるいは靈的な何ものかとの関連において考える際、非常に重要だからである。³⁾

〔……〕物質世界と靈的世界 (Seelenwelt) との関係は——固体と氣體との関係あるいはもっと的確に言うならば、固体と力との関係のようなものである。(II, 582, 242)

すなわちノヴァーリスが見る世界は次のようなものだ。そこでは「重力」が妨げられることによって「結晶」となり、「氣息」が同様に「音」として現象する。より原理的に言えば、「氣體」や「力」といった不可視のもの、捉えがたいものが必ず固体として現象するように、靈的なものは必ず物質として現象するのである。だから上記引用に続けてノヴァーリスは、「〔……〕精神なくしては色彩も輪郭もなく、——さまざまな音等々もない——さまざまな感触も、固い表面もなければ、境界などもない〔……〕」(II, 582, 243) と言うのである。⁴⁾

こうした世界観に照らしたとき、「すべては種子である」(II, 563, 188) という断章において、ノヴァーリスはまさに世界を本来の意味での「種子」と見なすことを要求している。「種子」は固く閉じた殻の中に、多種多様な形態を取って無限に伸び広がっていく力を有している。静的に見える「種子」のうちには、決して静止することのない力が渦巻いているのだ。そして「世界」がこうした「種子」だとすれば、それは静止した物質の集合体などでは決してない。静的に見えるこの「世界」のうちには力としての原理が渦巻いており、その限りにおいて「世界」は「精神」の現象と見なされる。それは固定的な物質などではなく、動的であり、さらには種子が宿す本来の力がそうであるように、有機的なものである。それゆえノヴァーリスは、「世界」とは「精神の啓示」であると述べるのだ。

1-2. 世界は把握される

世界が本来的にそのようなものであるにも拘らず、本章の冒頭で示した断章では、「精神の啓示」や「伝達」はもはや成立しない、と言われている。それはすなわち、「世界」を「精神」の現象として捉えられないことを意味する。

文字が精神に対置されるように、もしくは手段が目的に対置されるように、そのようにしてのみ有用なものはただ快適なものに対置される。心情的なものの直接の所有や獲得はもちろん、われわれの根源的な望みである。しかし現在の世界では、すべてはまったく限定され、ある種異質な前提のもとで到達されるのみである。(III, 689, 686)

「心情的なものの直接の所有や獲得」という「われわれの根源的な望み」が叶えられることはない。そのことの理由の一つを、ノヴァーリスはそれとは別の知覚という領域に移しつつ、類比的にこう記す。

われわれのすべての知覚能力は眼に似ている。対象が正しく瞳に映し出されるには、像を倒立させる媒体を経てこなければならない。(II, 414, 9)

対象の知覚には、感覚器官が必要である。視覚における瞳や視神経などの器官は、対象が反射した光を受け取ることによってそれを像として知覚する。瞳が受け取ったその光は、網膜上で倒立した像を結ぶ。だがこうした感覚器官を媒体にした知覚において、われわれは対象そのものを決して直接的に知覚しているのではない。むしろ対象を倒立させ、反転させる媒体を介してしか、対象を知覚しえないのだ。

われわれはいたるところに絶対的なものを探し求めるが、見出すのはいつも事物のみである。(II, 412, 1)

「雑録集」(Vermischte Bemerkungen)の冒頭を飾るこの断章が示すとおり、「絶対的なもの」(das Unbedingte)すなわち「制限されないもの」、「条件づけられないもの」は文字通り、「事物になりえないもの」として「事物」(Ding)に対置される。われわれは「絶対的なもの」もしくは「事物になりえないもの」を探し求めるが、見出すのはいつも「事物」のみである。すべては「限定され(事物化され)」(bedingt)していると述べられる断章686においても、事態はやはり同様だ。われわれが探し求める「事物」ではない何かとは、同断章において述べられる、われわれが「直接の所有や獲得」を望むものであり、前章で述べた「精神」である。しかし、われわれはいつも固定化された「事物」しか見出すことができない。それはわれわれが「探し求める」もの、「直接の所有や獲得」を望むものではない。

1-3. 世界は伝達する

われわれはすべてを「事物」としてしか見出しえず、その限りにおいて「探し求める」もの、「直接の所有や獲得」を望むものには決して到達しえない。こうした事態はノヴァーリスによって次のように表現される。

かつてはいっさいが精神の顕現(Geistererscheinung)であった。今日われわれが目にするのは、われわれには理解できない死せる反復ばかりである。ヒエログリフの意味は失われている。われわれはいまだに、より良き時代の果実を食って生きているのだ。(II, 545, 104)

本稿の冒頭で挙げた断章にあるように、「世界」が本来「伝達」であるならば、それは「ヒエログリフ」⁵⁾のようかつては文字として読み解くことができたはずだ。しかしいっさいを「事物」としてしか認識しえない現状において、「世界」は「精神」の動的かつ有機的な顕現ではありえない。そうした有機的な動性を失った「世界」は、われわれにとって「死せる反復」以外の何ものでもない。その限りにおいてわれわれは、諸現象の下で胎動し

ている「精神」を認識することができず、「世界」はいっさいの「伝達」をやめる。

それでは「世界」はいかにして再び「伝達」たりうるのか、その手がかりは次に挙げる断章にある。

魂の座は、内界と外界が触れあう (sich berühren) ところにある。内界と外界が浸透しあう (sich durchdringen) ところでは——浸透するすべての箇所には魂の座がある。(II, 418, 20)

ここで語られるのは「内界」と「外界」という、本来相容れることのない二領域の関わり方である。ここで用いられている、「触れあう」そして「浸透しあう」という二つの動詞にはどちらにも sich という再帰代名詞が付されている。この再帰代名詞は、その行為が相互的であることを表す。

この両者の相互的な関わりにおいて、単なる「事物」はもはや見出されえない。なぜなら接触という知覚において、その行為者が対象に触れるとき、対象の側も必ずその行為者に触れるはずだからだ。この相互的な知覚において、知覚する側、される側という両者の固定的な主客関係はもはやない。⁶⁾ 両者はともに知覚されながら知覚する主体である。この相互的な接触もしくは浸透が、一方が他方を単なる「事物」へと押し込めてしまうことのない両者の関わり方だという意味において、その箇所には必然的に魂が宿ることになる。だからノヴァーリスは、「愛撫 (Liebkosungen)こそ真の伝達ではないか」(II, 564, 197)と言うのである。

2. 人間

「世界」が「精神の現象」であるならば、それは「人間」という主体に対置される客体などでは決してなく、活動する主体であり、有機的なものである。こうした観点において、「世界」に対置されるものではない「人間」とは一体いかなる存在であろうか。そしてそのような「人間」は、いかにして「世界」に現象した「精神」に至ることができるのであろうか。本章は、以下に挙げる断章を手がかりにノヴァーリスの「人間」観を探る。

ミクロコスモスという観念は、人間にとって最高の観念である。／われわれは同様に、宇宙観測器である。(II, 594, 314)

2-1. 人間はミクロコスモスである

「全宇宙はわれわれの内部にあるのではないか」(II, 416, 17) という一節はよく知られているが、このようにノヴァーリスは、「人間」を「ミクロコスモス」になぞらえる。

人間が、何かあるものの胚芽を自らのうちに持っていないならば、どうしてそれに対

する感性を持つことができようか。私が理解するはずのものは、私自身のうちで有機的に成長しなければならない——そして私が学んだように見えるものは、ただの養分——有機物の刺激剤に過ぎない。(II, 418, 19)

「人間」があるものに対する「感性」を持つことができるのは、自らのうちにその「胚芽」を有しているからである。「マイクロコスモス」としての「人間」は、「マクロコスモス」としての「世界」に相応し、それを映し込んでいる。そのような意味で「人間」は、「世界」を「胚芽」として自らのうちに持つ。それは同時に、「世界」を理解する可能性を「人間」が有していることを意味する。ゆえに「マイクロコスモスという観念は、人間にとって最高の観念」なのである。「私が学んだように見えるもの」は、外部から取り入れた見知らぬ何かではない。なぜなら「人間」は「世界」のいっさいを「胚芽」としてそのうちに持っているからだ。「私が学んだように見えるもの」とは、その「胚芽」を成長させるための「養分」であり「刺激剤」にすぎないのである。

「すべては種子である」というノヴァーリスの世界観において、「種子」と見なされるのは「世界」だけではない。「人間」もまた「世界」の「胚芽」を持つという点で、「種子」なのである。その限りで「人間」は、「世界」に對置されるのではなくその一部であり、「世界」がそのうちに映し込まれた「マイクロコスモス」なのである。「世界」の「胚芽」をそのうちに持つ「人間」は、だからこそ「世界」に対する「感性」を持ちうる。そしてこの「感性」は、「世界」の「伝達」を受け取る「感性」にほかならない。

2-2. 人間は媒体である

本節は「世界」を「精神」の現象として、そして「伝達」として捉える「人間」の活動について考察する。そうした「人間」の活動をノヴァーリスは「望遠鏡」になぞらえる。

可視のものはみな不可視のものと——聞き取れるものは聞き取れないものと——触知しうるものは触知しえないものと——接している。おそらくは思考しうるものは思考しえないものに——。

望遠鏡は、入立的な不可視の器官である。／容器。／

想像力 (Einbildungskraft) は、われわれの五官の代替となりうる驚嘆すべき感官であり——もともとわれわれの恣意のなかにはよく見受けられるものである。外的感官がまったく力学の法則のもとにあるように見えるのに対し——想像力は、明らかに、外的刺激の存在や接触に拘束されない。(II, 650, 481)

このように、ノヴァーリスの考える現象世界においては、知覚可能なものと知覚不可能なものとの互いに「接している」。だから「どのような現象も、無限につづく鎖の一つの環」(III, 574, 140)として関連し合い、一つの大いなる連鎖をなす。しかし現状において、その連鎖は断ち切られてしまっている。ゆえにわれわれは「世界」を「精神」の現象とし

て、もしくは「伝達」として捉えることができないのだ。その断絶された連鎖を回復するには、「人間」が媒体として介入する必要がある。

そのときに新たな感覚として位置づけられるのが「想像力」である。力学の法則に拘束されない「想像力」は五官の代替となって、不可視のものや聞き取れないもの、触れたり思考したりできないものに対する感覚となる。五官では捉えられない対象に対する感覚である「想像力」を持つ「人間」は、ゆえに人間の五官によっては不可知の宇宙を観測できる「望遠鏡」になぞらえられるのだ。この媒体としての「人間」の役割が、次に挙げる断章において決定的に述べられている。

人間とは、われわれの惑星にそなわった高次の感性 (der höhere Sinn)、この構成要素と上位の世界とを結ぶ神経であり、この惑星が天に向ける眼である。(II, 565, 201)

すべてを連鎖的に捉えるノヴァーリスにとって、此岸である「われわれの惑星」と、彼岸である「上位の世界」とはやはり断絶してはいない。両者が断絶されていないからこそ、「人間」はそれらを「結ぶ神経」となりうる。「高次の感性」という語において、「人間」は「伝達」の単なる受け手ないし送りに位置づけられるのではなく、此岸と彼岸との「伝達」を媒介する役割を担うものであることが示される。

3. 世界を記述する

本来動的で有機的であるはずの「世界」を、そのようなものとして記述するのは不可能である。しかしノヴァーリスは、「真に詩的な言語は、有機的 (organisch) で生きたもの (Lebendig) のはず」(II, 440, 70) だと述べ、「世界」を記述する何らかの可能性を見出していた。本章は、彼がいかにして有機的で生きた記述を試みたのか、「詩」、「百科全書」、「断章」というノヴァーリスが重視していた三つの方法から辿る。

3-1. 詩

ノヴァーリスが動的で有機的な記述の可能性を見出していた方法の一つが「詩」である。それは前章において示した、マイクロコスモスでありかつ媒体であるという「人間」の役割を、とりわけ詩人が担うと彼が考えていたことに深く関わっている。

真の詩人は全知である。——かれはマイクロの現実世界なのだ。(II, 592, 296)

前章の第一節において述べたように、ノヴァーリスにとって本来「人間」はマイクロコスモスであった。かかる「人間」のうちには「世界」が映し込まれている。そしてマイクロコスモスとしての「人間」は、「世界」を「胚芽」として自らのうちに持つ。種子のうちにあり、芽となって成長するこの「胚芽」には、無限に伸び広がるすべてがあらかじめ書き込

まれている。ゆえに、「ミクロの現実世界」としての「真の詩人」は「全知」である。さらに次に挙げる断章において、「詩人」は「祭司」と同一視されることで媒体の役割を担うことが述べられる。

[……] 詩人と祭司は、初めは一つだった——ただ後の世になってから分かれたにすぎない。しかし真の祭司がいつの世にも詩人であったように、真の詩人はつねに祭司であった——そして未来にはこうしたかつての事態がふたたびもたらされるのではないだろうか。[……] (II, 444, 75)

祭司は彼岸のものを啓示として此岸に伝達する存在である。そしてノヴァーリスによれば、詩人もまた同様の存在なのだ。詩人は「世界」を把握するのではなく自らを媒体とし、詩として「世界」を「伝達」する。ノヴァーリスにとって詩人の言葉とは「音の響き」(II, 533, 32)である。言葉は文字として固定された概念ではなく、空気を震わせる運動として、「音の響き」として生きている。それゆえ、「詩作されたものは、一個の生きた個体でなければならない」(II, 534, 36)のである。

そのような生きた言葉を操る詩人の「世界」は、「尽きせぬメロディー」(II, 533, 32)と表現される。なぜなら詩人の生きた言葉が表すのは、把握され固定された「事物」でも文字でもなく、動的で有機的な「精神」の現象としての「世界」だからである。「音の響き」である詩人の言葉は、まるで「種子」のように、有機的に広がりゆく可能性をそのうちに有している。

3-2. 百科全書

このように無限の可能態をも包括する、動的で有機的な「世界」を記述するためにノヴァーリスが打ち立てたのが「百科全書」の構想である。ノヴァーリスの百科全書は、フランス啓蒙主義の百科全書派に見られるような、項目ごとに分類された記述とは異なる。⁷⁾彼は、ある項目がまた別の項目へと関連しながら伸び広がっていくような、有機的な記述による百科全書を目指した。なぜなら項目がそれぞれ分類され区切られるとき、その記述された対象は、ばらばらに切り離され、固定された概念と化してしまうからだ。それは動的でも有機的でもありえない。しかしノヴァーリスの百科全書においては、それぞれの項目は互いに切り離されることなく、有機的に関連し合い、互いを指し示し合っている。このような百科全書的方法でしか「世界」は記述しえないとノヴァーリスは考えたのだ。こうした記述の方法は、言葉に対する彼の考え方と深い関わりを持っている。

[……] 言葉は数式と同じようなものだということが、この人々に分かってもらえさえすればいいのだが。——数式は、それ自体で一つの世界を構成し、——自分自身とのみ戯れ、自らの不思議な性質しか表現しない。そしてまさにそれゆえに、数式はあれほど表現豊かであり——まさにそれゆえにそこに事物相互の不思議な戯れを映し出す。

その自由によってのみ、数式は自然の構成要素 (Glied) となり、その自由な運動のなかにのみ、世界霊が現れ、数式を事物の繊細な基準や見取り図となすのだ。言葉についても同じことである — [……] (II, 672)

これは「独白」(Monolog) と題された、言葉に関するノヴァーリスの記述の一部である。ノヴァーリスにとって「言葉は数式と同じようなもの」である。「数式」は何か特定の事柄に従属し、それについて表現するのではなく、「それ自体で一つの世界を構成し」、「自らの不思議な性質しか表現しない」。そしてそれゆえ「数式」は、「事物相互の不思議な戯れを映し出す」ことができる。このようなものとして、「数式」は「自由」である。この「自由」な「数式」が対象を「映し出す」とき、それは決して把握や固定ではない。「自由」であるがゆえに、「数式は自然の構成要素」となるのだ。かかる「数式」は「世界」から切り離されたもの、もしくは「世界」を対象的に把握するための記号ではない。「自然の構成要素」としての「数式」はいわばマイクロコスモスであり、そのうちに「世界」を「映し出す」。ノヴァーリスの数式に対するこうした考えには、代数学がより深く関わっている。

ドウピソンによる代数学の化学的解説。これらの記号は数字のように互いに入り組んで流れてはいかない。むしろ、いずれの構成のうちにもさまざまな要素やそれらの関係、そして構成の方法が見て取れる。ソレラハ関連ゲアルガ、混乱デハナイ⁸⁾。(II, 563, 192)

数字による数式が映し出すのは、その数値が示すある一つの事象だ。しかし一方で記号による「代数学」は、さまざまな「要素」やその「関係」、そして「構成の方法」を示すことができる。なぜなら「代数学」の記号はあらゆるものに変換可能だからだ。「代数学」の「数式」は、それを構成する記号同士の関係を示す。その「数式」は特定の事柄から離れ、それ自体で独自にさまざまな「要素」の「関係」そして「構成の方法」を示す。それゆえ「数式」に「世界霊が現れ」、「数式」が「事物の繊細な基準や見取り図」となるのだ。そしてそのような「数式」は、「世界」の完全な把握や記述の不可能性までも包括しうる記述方法である。

不完全なものだけが把握されうるのであり、— われわれを先へと導くことができる。完全なものはただ享受されるにすぎない。自然を把握したいなら、自然を不完全なものとし、そして未知の変化する媒介項に至らなければならない。

／いっさいの規定は相対的である。／ (II, 559, 151)

ここでノヴァーリスは、「不完全なものだけが把握されうる」と述べることによって、対象を完全には把握しえないことを克服しようとはせず、むしろそれを受け入れる。なぜなら「われわれを先へと導くことができる」のは、「不完全なもの」だけだからである。「完

全なもの」は「ただ享受される」のみであり、われわれをそれ以上導くことはできない。一方で未だ完成には至っていない「不完全なもの」は、それゆえに、より完全なものを目指してわれわれを先へと導くことができる。そして有機的で動的な「世界」ないし「自然」とは、そうした決して完成に至ることのない「不完全なもの」である。だから「自然を把握したいなら」自然をそうした「不完全なもの」と見なさなければならない。「不完全なもの」である「自然」は、常に「未知」であり、かつ「変化」する。そして「未知の変化する媒介項」という表現から想起されるのは、まさに「代数学」である。「代数学」に用いられる記号は「未知」であり「変化」する。「代数学」がそのように、「未知」で「変化」するものを扱うがゆえに、ノヴァーリスは代数学に「さまざまな要素」やその「関係」そして「構成の方法」を見て取るのだ。

そして「数式」の性質が以上のようなものだとなれば、「言葉についても同じことである」。そうした「数式」の性質を持った「言葉」が、ノヴァーリスの百科全書を構成する。すでに述べたようにノヴァーリスの百科全書は、ある項目が別の項目へと連関しながら伸び広がるように記述がなされ、項目同士の関係を示す。これは、先に挙げた断章192においてノヴァーリスが述べる「代数学」の性質と等しい。「代数学」は「未知」のものや「変化」するものもその要素の一つとして取り込み、その構成要素の「関係」や「構成の方法」を示す。

そして言葉についても同様に考えたノヴァーリスは、その実践として百科全書による「世界」の記述を試みたのだ。一見すると閉ざされて見える「数式」が、そのうちに動的で有機的な「世界」を映し出すと同様に、百科全書もまたそのうちに動的で有機的な「世界」を映し出す。それはまるで、一見すると閉じて見える殻の中にあらかじめすべてが書き込まれた「胚芽」を持ち、無限に伸び広がっていく可能性を有する「種子」である。

3-3. 断章

そして「断章」もまたノヴァーリスにとり、本来記述しえないはずの「世界」を記述しうる動的で有機的な方法であった。

生成した ([g]ewordne)、そして生産された (geborne) 断章 (II, 626, 24)

「生成した」が自ら伸び広がる能動性を、「生産された」が何かによって生み出されるという意味での受動性をそれぞれ表現しているとするならば、それは能産的であると同時に所産的でもある自然や植物を想起させる。⁹⁾ こうした植物的なイメージを、ノヴァーリスは「断章」に対して抱いていた。能産的所産物ともいうべき「断章」は、あるものを完成されたものとして提示するのではなく、まるで無限に伸び広がっていく植物のように、未完成のもの、これから生長していくものとして記述する。

書物を書く術は未だ発見されていない。しかしそれは発見されようとしている。ここ

に記したような断章は、文学的な種子である。そのなかにはもちろん、たくさんの実のない種も混ざっているだろう——しかしながら、そのうちのいくつかでも芽を出してくれさえすればいいのだ。(II, 462, 104)

固く閉ざされ静的に見える「種子」は、そのうちに無限に伸び広がる可能性を「胚芽」として有し、そこにはその無限があらかじめ書き込まれている。「断章」とは、そうした「種子」であるとノヴァーリスは考える。「種子」である「断章」は、動的で有機的なものを固定してしまうことなく、動的で有機的なままに記述する。それは絶えず生成する「不完全なもの」である「世界」を、不完全なままに記述しうる方法である。ゆえに「断章」は「文学的な種子」なのである。

だからこそノヴァーリスは、本来記述しえない「世界」の記述の可能性を「断章」に見出したのだ。

おわりに

ノヴァーリスの「断章」とは「種子」である。ゆえに「断章」は、「世界」における「あらゆる見方や考えの根底」たりうるのである。動的で有機的な「世界」をそのままに記述しうるこの「断章」によって、彼は本来記述しえない「世界」の記述を試みた。彼にとって「世界」とは、知覚され把握される単なる「事物」ないし客体ではない。静的に見える「世界」のうちには、決して静止することない「精神」が胎動している。それは静的に見える殻の中に、絶えず生成しながら無限に伸び広がる可能性を有する「種子」であり、「伝達」する能動的な主体である。

「真に詩的な言語」は「有機的で生きた言語」である、というノヴァーリスの思想からも明らかなように、彼は「詩」を何か特定の音韻や音律を持つ単なる記述の形式とは考えない。「真に詩的な言語」とは、「有機的で生きた」記述を指すのであり、その限りにおいて「百科全書」も「断章」も同じく「詩」である。「百科全書」や「断章」によって有機的で生きた記述を試みたノヴァーリスは、紛れもなく真の詩人を目指したのだ。

友よ、大地は貧しい、われわれはたくさんの種を蒔かなければならない、わずかな収穫を得るためにも。(II, 413)

これは断章集「花粉」(Blühenstaub)の指針とも言える冒頭の一文である。把握され固定化された、死せる貧しい大地を生き生きと蘇らせるため、「たくさんの種を蒔かねばならない」と彼は言う。たくさんの「断章」をつくることは、彼にとってたくさんの「種」を蒔くことを意味した。「ノヴァーリス」というペンネームは、彼の祖先がde Novaliと名乗っていたことに由来し、その意味はラテン語で「新しい地を耕す者」である。自らの物書きとしての使命をその名に冠し、ノヴァーリスは「断章」という無数の「種」を蒔いたのである。

注

- 1) Novalis: *Schriften. Die Werke Friedrich von Hardenbergs*. Hg. v. Paul Kluckhohn und Richard Samuel. Zweite, nach den Handschriften ergänzte, erweiterte verbesserte Auflage in vier Bänden und einem Begleitband.
 Bd. 2: Das philosophische Werk I. Hg. v. Richard Samuel in Zusammenarbeit mit Hans-Joachim Mähl und Gerhard Schulz. Stuttgart: Kohlhammer 1965.
 Bd. 3: Das philosophische Werk II. Hg. v. Richard Samuel in Zusammenarbeit mit Hans-Joachim Mähl und Gerhard Schulz. Stuttgart: Kohlhammer 1968.
 ノヴァーリスの著作の引用はすべてこの歴史批判版全集により、引用末尾にローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を、そののち番号の付されたものについてはそれを記す。傍点による強調は、原文ではイタリック体で表記されている。
- 2) 17世紀から18世紀にかけて、光に関する研究は世界観を一変させるほどのめざましい進歩を遂げていた。「ニュートンによれば、光線は太陽の中で生みだされ、反射や散乱、屈折によって変わることなく、空間を通過して私たちのところまで伝わってくる。しかも、各々の種類の光線は目の中に異なる感覚を作りだす。赤、緑、青などというように。自然の日の光は多くのそうした光線の総和であり、白く見える。白色光に作用するプリズムは、構成要素である光線を元々の種類に分ける解析器具である」。(アーサー・ザイエンス著、林大訳『光と視覚の科学 神話・哲学・芸術と現代科学の融合』、白揚社、1997年、103頁)。
- 3) 中井章子によると、「ノヴァーリスの Geist ということばには、精神、霊、精霊の意味が混然一体となってまざっている」。(中井章子「ノヴァーリスにおける〈自然〉」、日本独文学会『ドイツ文学』第60号、1978年、66頁)。
- 4) ノヴァーリスにおける気体と魂の関連については中井章子が「ノヴァーリスにおける〈ガイスト〉を理解するには、〈ガイスト〉を哲学的な〈精神〉として、哲学的関連を究めること〔……〕とともに、複数形も可能な〈霊〉の面と、自然学の〈生気論的実在性〉を持つ〈気〉の面も忘れてはならない。ノヴァーリスは、哲学と宗教と自然学の〈ガイスト〔精神・霊・気〕〉を、いずれかのひとつに還元することなく、重ね合わせて理解している」と述べている。(中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想』、創文社、1998年、46頁)。
- 5) 古代エジプトにおいて使用されていた象形文字であるヒエログリフは、1799年にロゼッタ・ストーンが発見されることによって後にフランスの考古学者シャンポリオンが解読するが、当時は未解読であった。
- 6) ノヴァーリスにおける能動・受動の同時性については、宮田眞治が言及している。(「イエナ・ロマン主義における〈能動・受動〉モデルの問題」、『ヘーゲル哲学研究』第18号、こぶし書房、2012年、19-32頁参照)。そこではロマン主義における、ある出来事性の記述を、創作活動及びそれに伴う内的経験に準拠したそのモデル

化と仮定している。その上で、ノヴァーリスについては精神／霊 (Geist) と靈感 (Begeisterung) について、能動および受動の分離と結合のあり方が検証されている。

- 7) ダランベールは「百科全書序論」において、百科全書の目的とは「人間知識の順序と関連とをできるかぎり明示」することだと述べる。百科全書派の「連関」とは秩序立った連関であり、ノヴァーリスの目指した有機的な連関とは異なる。(ディドロ、ダランベール編、桑原武夫訳編『百科全書——序論および代表項目』、岩波文庫、1971年、18頁参照)。
- 8) カタカナ表記のこの一文は原文ではフランス語で記されている。
- 9) 西洋の自然観の一つに、能産的自然 (natura naturans) と所産的自然 (natura naturata) という二つの側面から自然を捉える方法がある。そうした自然観はノヴァーリスにおいて、「自然はエオリアンハーブだ」(III, 452, 966) と表現される。吹く風により音を鳴らすエオリアンハーブは、演奏するという能産的役割と、音が鳴るといふ所産的役割とを同時に果たす。それをノヴァーリスは能産的であると同時に所産的である自然のイメージとを重ねている。

Was ist das „Fragment“ bei Novalis?

—Darstellung des Undarstellbaren—

Haruka OSAWA

Am Anfang

Der Zweck dieser Abhandlung ist die Untersuchung, was das „Fragment“ bei Novalis ist. Novalis sagt, dass Fragmente der Fond aller wirksamen Meinungen und Gedanken der Alltagswelt sind, und versuchte das durch seine Fragmente zu beweisen. Anders gesagt, suchte er die Welt durch seine Fragmente darzustellen. Diese Abhandlung untersucht, wie Novalis „die Welt“, „den Menschen“ und „die Darstellung“ ansieht. Durch die Betrachtungen ergibt sich die Antwort auf die Frage, was das „Fragment“ bei Novalis ist.

1. Die Welt ist der Geist

Novalis gibt an, dass die Welt eine Mitteilung-Offenbarung des Geistes ist, aber gleichzeitig sagt er, dass die Mitteilung und die Offenbarung des Geistes verloren gegangen sind.

Novalis sah nicht die Welt als die unorganische Materie, sondern als das Organische oder das Lebendige an. Er dachte, dass die Welt die Erscheinung des Geistes ist, deshalb galt für Novalis: „Alles ist Samenkorn“. Wir sehen das Samenkorn als etwas Unbewegliches oder Beharrliches, aber in der Tat hat das Samenkorn die Möglichkeit, unendlich zu wachsen. Es gibt eine lebendige bewegliche Kraft in dem Samenkorn. Auf gleiche Weise gibt es eine lebendige bewegliche Kraft unter allen Erscheinungen in der Welt. Diese Kraft nannte er den Geist. Also dachte Novalis, dass die Welt die Offenbarung des Geistes ist.

Wenn wir die Welt erkennen, begreifen wir sie in vielen Fällen als etwas Unbewegliches oder Beharrliches. Wenn die Welt begriffen wird, wird sie ein unbewegliches, beharrliches Ding. Für Novalis ist die Welt, wie gesagt, die Mitteilung und die Offenbarung des Geistes. Aber wenn die Welt begriffen wird, kann sie nicht mehr die Offenbarung des Geistes sein, und nichts mitteilen. Also sagt Novalis, dass die Mitteilung oder Offenbarung des Geistes verloren gegangen ist.

Die Welt, die als der Begriff erfasst wird, ist ein unbewegliches beharrliches Ding, gleichsam ein Objekt. Novalis denkt, dass wir die Welt nicht begreifen, sondern berühren sollen. Die Berührung ist eine unmittelbare gegenseitige Wahrnehmung. Wenn wir die Welt berühren, berührt die Welt uns gleichzeitig. Dabei ist die Welt nicht ein bloßes Objekt, sondern ein Subjekt. Wenn die Welt ein Subjekt wird, kann sie ein lebendiges bewegliches Wesen sein. Es ist die Mitteilung und die Offenbarung des Geistes. Also sagt Novalis, dass Liebkosungen ächte Mitteilungen sind.

2. Der Mensch

Novalis sagt, dass der Mensch der Mikrokosmos ist, der der Welt als Makrokosmos entspricht. Der Mensch als Mikrokosmos hat den Sinn für die Welt, weil er die Welt in sich spiegelt bzw. die Welt als „Keim“ in sich hat. Weil der Mensch den Sinn für die Welt hat, kann er die Mitteilung der Welt oder die Offenbarung des Geistes annehmen. Für Novalis ist der Mensch auch das Samenkorn, das den Keim der Welt in sich hat.

Novalis sagt, dass der Mensch auch das Kosmometer ist. Novalis denkt, dass der Mensch die Mitteilung der Welt, die er mit seinen äußeren Sinnen nicht wahrnehmen kann, mit seiner „Einbildungskraft“ wahrnehmen kann. In dieser Bedeutung ist der Mensch das „Cosmometer“, das den Kosmos beobachtet. Der Mensch kann als das Medium die Mitteilung der Welt mit seiner Einbildungskraft aufnehmen.

3. Darstellung der Welt

Novalis sah die Welt als das Lebendige und das Organische an, und suchte die Welt lebendig organisch darzustellen. Er fand die Möglichkeit solcher Darstellung in der „Dichtung“, „Enzyklopädie“ und dem „Fragment“.

Novalis dachte, dass er die Welt durch Dichtung organisch und lebendig darstellen kann. Novalis meint, dass die echt poetische Sprache organisch lebendig sein soll. Der Dichter kann organisch lebendig dichten, weil er die „Einbildungskraft“ in seiner Gewalt hat. Die organische lebendige Dichtung kann die organische lebendige Welt so abbilden.

Novalis suchte die Welt enzyklopädisch darzustellen. In seiner Enzyklopädie werden die Sachen nicht in Klassen eingeteilt, sondern stehen miteinander im Zusammenhang. Eine Sache wächst ebenso wie die Pflanze. Novalis dachte, dass er die Welt durch die organische lebendige Enzyklopädie darstellen kann.

Das Fragment ist eine unvollkommene Weise der Darstellung. Novalis dachte, dass die Welt durch Fragmente darstellbar ist, weil die Welt wie die Pflanze unvollkommen ist und weiter wächst. Das Fragment kann die Welt organisch darstellen, denn es selbst ist unvollkommen wie die Pflanze.

Zum Schluss

Das „Fragment“ von Novalis ist das „Samenkorn“. Für Novalis ist die Welt die Mitteilung und die Offenbarung des Geistes, weil sie organisch und lebendig ist, wie das „Samenkorn“. Novalis suchte die organische, lebendige Welt, die nicht dargestellt werden kann, durch seine Fragmente organisch lebendig darzustellen.